

令和3年度 企画展



ラムサール条約登録 30 年

ウトナイ湖

うつりゆく自然とその未来



苫小牧市美術博物館

はじめに

かつて石狩低地帯に広がっていた湿原の風景を残すウトナイ湖。数万羽を超える水鳥が羽を休め、希少な種類を含む様々な草花が湖岸を彩るなど、豊かな自然をたたえる一方、古くから重要な交通ルートとして利用されるなど、苫小牧の歴史を象徴する場所でもあります。そのウトナイ湖は1991年、国際条約である「ラムサール条約」の登録湿地に選ばれました。世界から見ても重要な湿地であることが認められたのです。

それから30年、ウトナイ湖の現状はどうなっているのだろうか？そんな疑問から私たちは、過去の文献や最新の調査研究などから情報を集め、必要な標本は新たに採集、製作しました。準備を通して感じたのは、生物の情報は30年以上前のものが中心で現在の情報は少ないこと、水質汚染や乾燥化、生物の減少など様々な問題が明らかになっているなど、その将来は決して明るいものばかりではないことでした。

本展では、収集した情報を元に、映像や写真、数々の標本を通して、ウトナイ湖の自然の基本的なことや抱える問題について展示しました。みなさまがウトナイ湖の魅力を見直し、関心を持っていただけたら幸いです。

最後になりますが、本展を開催するにあたり、多大なご協力をいただいたみなさまに厚く御礼申し上げます。

苫小牧市美術博物館

目次

1. ラムサール条約とウトナイ湖	01p
2. ウトナイ湖の成り立ち	02p
3. ウトナイ湖とその周辺に生息する動植物	
(1)鳥類	04p
(2)植物	07p
(3)昆虫	09p
(4)魚類	10p
(5)ほ乳類	11p
4. ウトナイ湖の問題	12p
5. ウトナイ湖と周辺の歴史・出来事	14p
引用・参考文献	15p
展示資料リスト	15p
展示風景	17p
協力機関・協力者	

<凡例>

- 本書は企画展「ラムサール条約登録30年 うつりゆく自然とその未来」に際して作成した。
- 本書に掲載された解説文、写真、図版の一部は、企画展に展示していないものもある。
- 所蔵先の記載および引用のない写真、図版はすべて、苫小牧市美術博物館所蔵である。

1. ラムサール条約とウトナイ湖

■ウトナイ湖とは

面積約275ha、周囲約9km、平均水深は約0.6mの淡水湖で、苫小牧の中心からは北東に約11kmの位置にあります。美々川、オタルマップ川など3つの川が流入し、勇払川から太平洋に流出しています。道内でも開発が最も進んでいる地域のひとつにありながら、原始の自然環境の姿を残す貴重な湖です。ウトナイ湖の名前は、アイヌ語の「ウツ・ナイ・トー（肋骨、川、湖）」が語源となっています。

ラムサール条約の登録のほか、1981年に公益財団法人日本野鳥の会が国内初の野鳥のサンクチュアリ（聖域）を設置し、1982年にウトナイ湖とその周囲（面積510ha）が国指定鳥獣保護区特別保護地区に指定されました。さらに2001年にウトナイ湖野生鳥獣保護センターが開設、2006年に東アジア・オーストラリアフライウェイパートナーシップに参加するなど、その自然環境の保護が進められています。



空から見たウトナイ湖（湖の右上方に新千歳空港が見える）
提供：（公財）日本野鳥の会



ウトナイ湖展望台からの眺め

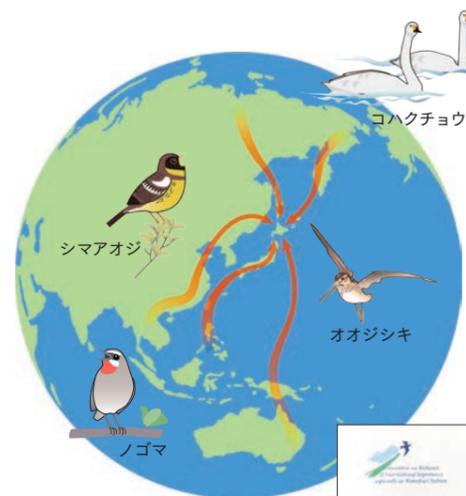
■ラムサール条約とは

1991年12月、ウトナイ湖は日本で4番目のラムサール条約登録湿地に登録されました。

ラムサール条約は正式名称を「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」と言い、1971年にイランのラムサールで開催された国際会議で採択され、1975年に効力を発生しています。2021年現在で締約国は172カ国、登録湿地は2,435カ所を数え、国内の登録地は合計53カ所となっています。

ウトナイ湖が登録された理由は、正式名称にもある通り、水鳥類の渡り鳥が国境を越えて移動をする時に羽を休めるための中継地として重要な役割を果たしていること、絶滅のおそれのある希少な種類や群れなど、2万羽以上の水鳥の営みを支えていることなどが評価されたためです。

周辺で様々な開発が計画される時代の中、当時の官民が一体となって条約登録を成し遂げたことは、自然保護の先進地と評価されるほど画期的な出来事でした。



ウトナイ湖を訪れる渡り鳥のルート
北海道博物館（2021）「あっちこち湿地～自然と歴史をめぐる旅～GUIDE BOOK」掲載の図に加筆

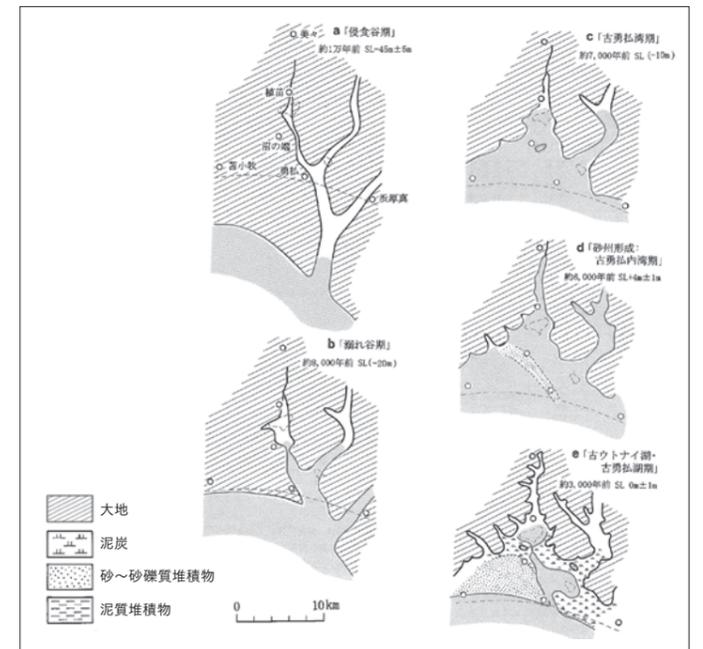
ラムサール条約登録証
所蔵：苫小牧市秘書広報課

2. ウトナイ湖の成り立ち

■ウトナイ湖の成り立ち

ウトナイ湖の位置する北海道の中央部は、日本海側の石狩平野から太平洋側の勇払平野まで標高50m以下の低い土地が南北に連なっており、この地帯を「石狩低地帯」と呼びます。

この一帯は約6000年前「縄文海進」によって、現在のウトナイ湖のある場所よりも内陸まで海が深く入り込んでいました。その後、地球が寒くなるとともに、しだいに海の後退が始まり、沿岸流（海岸に沿った海流のこと）によって砂州や砂丘が発達し、ウトナイ湖の南側を閉じて湖になったと考えられています。その間、何度も樽前山の噴火に見舞われ、ウトナイ湖にはその火山灰が何層にも堆積しています。



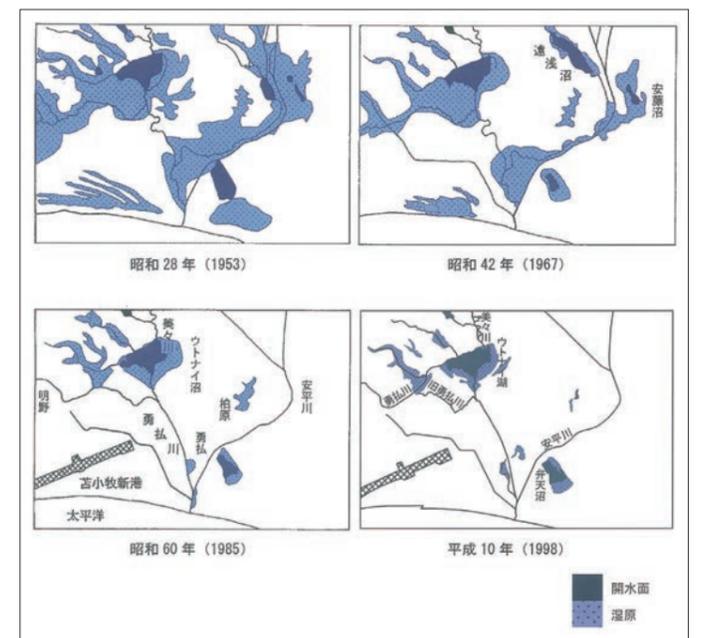
ウトナイ湖周辺の地形の成り立ち

池田ほか（1995）「北海道勇払平野の完新統分布と地形発達」地質調査所月報より

■ウトナイ湖の湿原

ウトナイ湖の地面には樽前山の火山灰が広く見られ、その上に薄い泥炭が積もっています。泥炭は気温が低く、植物が完全に分解されなかった土で、積もる速さは1年に約1～2mmほどです。ウトナイ湖や美々川の泥炭は厚さ20～40cmほどと薄く、1739年の樽前山噴火の後、約250年の間にできた比較的新しい湿原です。

また、ウトナイ湖と美々川を含む周辺の平野（勇払平野）には、かつては広大な湿原がありましたが、高度経済成長期に大規模な開発が進められた結果、1953年に4,897haあった湿原の面積は、1998年までに約670ha（1953年の14%）まで減少しました。ウトナイ湖や美々川周辺の湿原は、勇払平野に残された貴重な湿原です。



勇払地区一帯の湿原地域の変遷

北海道室蘭土木現業所（2007）「美々川自然再生計画書～水環境と地域の共生に向けて～」より
（現 北海道胆振総合振興局 室蘭建設管理部）

■ウトナイ湖と周辺の水域

○美々川は大昔の姿を残す川

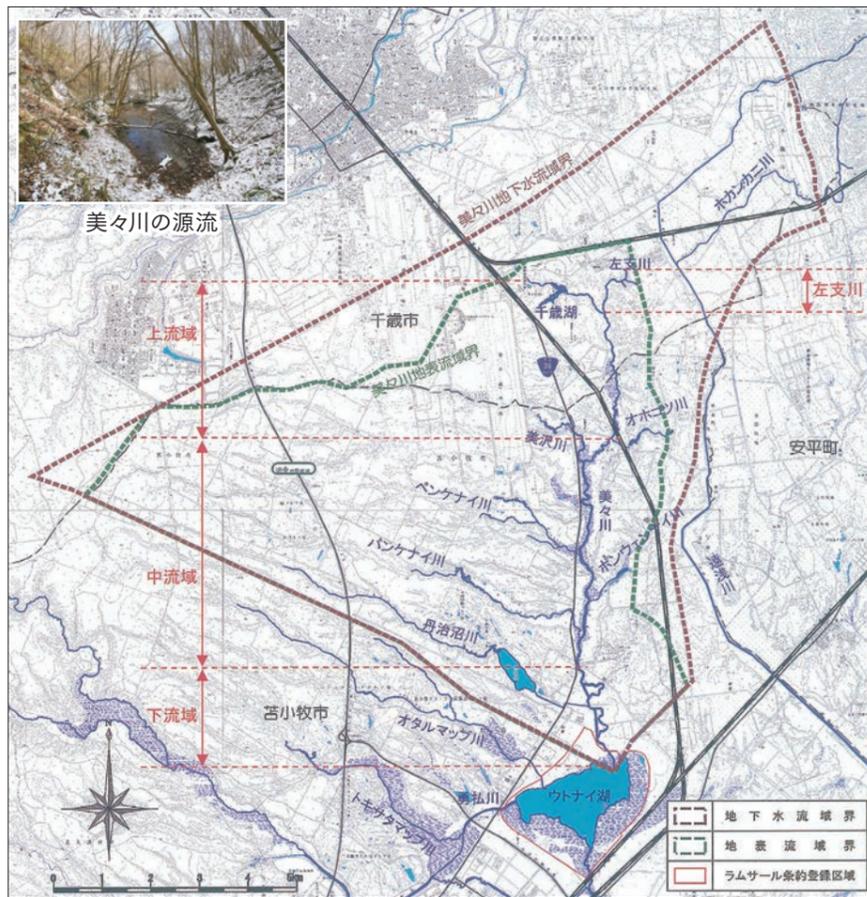
ウトナイ湖には3河川（美々川、オタルマップ川、勇払川）が流入していますが、最大の水量を注ぎ込んでいる川は美々川です。美々川は新千歳空港の北東の丘陵地から流れ出し、千歳湖を経て左支川、美沢川、パンケナイ川、パンケナイ川などの川を加え、湿原を形成しながらウトナイ湖に流入しています。ウトナイ湖の下流で安平川と合流し、太平洋に注いでいます。古くから開発の進んだ地域にあって、美々川は大昔の川の景観を持つ道央では数少ない川です。

○水を保つのは豊富な湧き水

ウトナイ湖や美々川の周辺では、支笏湖の火山や樽前山の噴火による火山灰が厚く積もっています。火山灰は水を通しやすいことから、大地に降った雨を地下にしみ込ませ、その水は山の麓から湧き出ています。このため、美々川周辺では左支川の源流で大規模な湧き水が生じており、美々川の水量を保つ要因となっています。

○多様な水環境を守るには

ウトナイ湖や美々川の豊かな自然は、湧き水をはじめとした地下水、川、湿地、湖沼など多様な水の環境によって成り立っています。ウトナイ湖の自然環境を守るには、美々川などその周辺環境の利用の仕方や人間の生活を含めて考える必要があります。



美々川の地下水流域
 国土地理院数値地図 25000「札幌」平成 12 年 12 月 1 日発行、
 「室蘭」平成 14 年 10 月 1 日発行に北海道室蘭土木現業所（現北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部）が加筆

3. ウトナイ湖とその周辺に生息する動植物

(1) 鳥類

ウトナイ湖では現在まで270種を超える鳥類が記録されています。これは日本で記録されている鳥類633種（日本鳥類目録第7版）の約4割にも及び、その大半が渡りをする鳥類です。ウトナイ湖では毎年、ウトナイ湖サンクチュアリのレンジャーによって約140種～180種の鳥類が確認されていますが、そのうちの約8割が渡り鳥です。

渡り鳥は、南方から来て繁殖する「夏鳥」、北方から来て越冬する「冬鳥」、移動の途中に立ち寄る「旅鳥」など、渡りのタイプによって分けられます。



夏鳥にとって渡りをする大きな理由は子育てです。冬、寒さの厳しいウトナイ湖ですが、夏は草木が旺盛に伸び、それを食べる昆虫も増えて鳥たちの食べる餌は多くなります。また、北海道よりも北の地域で子育てをするマガンやヒシクイのような旅鳥は、カムチャッカ半島などを經由してウトナイ湖に渡り、さらに南下して東北地方などで越冬します。ウトナイ湖は多くの渡り鳥たちが行き交う、交差点のような場所なのです。

■ウトナイ湖を代表する希少な鳥

ウトナイ湖とその周辺には絶滅のおそれのある種を含む多くの鳥類が生息しています。（公財）日本野鳥の会では、1981年のウトナイ湖サンクチュアリ開設以後、常駐するレンジャーが40年にわたって鳥類の調査を行い、多くのことが明らかになっています。ここではその調査から分かった希少な鳥類の現状について紹介します。

マガン *Anser albifrons* カモ目カモ科（文化庁：国指定天然記念物、環境省：準絶滅危惧、北海道：留意）

ロシア極東で繁殖し、春と秋の渡りの中継地としてウトナイ湖を通過、冬期は宮城県の伊豆沼や石川県の片野鴨池などで過ごします。ガン類は古来より国内で見られるごく身近な水鳥でしたが、明治時代に狩猟が解禁され、さらに戦後は宅地等の開発により、生息環境が消失したことで激減しました。1971年に国の天然記念物に指定されて以降、徐々に個体数は増え、近年は20万羽を超えています。



早朝、ウトナイ湖を飛び立つガンの群れ
 2020年3月14日撮影



国内に飛来するマガンの個体数の変化
 提供：(公財)日本野鳥の会

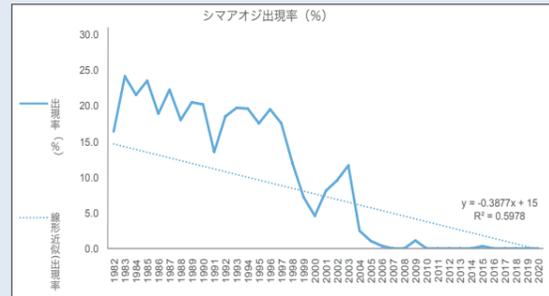
シマアオジ *Emberiza aureola* スズメ目ホオジロ科 (環境省: 絶滅危惧ⅠA類・国内希少野生動物種、北海道: 絶滅危惧ⅠA類)

日本では北海道のみで繁殖し、普通に見られる夏鳥でしたが、1980年代以降、生息数、分布域ともに急速に減少しました。ウトナイ湖でも1990年代から減少し始め、2015年に確認されたのを最後に記録が途絶えています。2015年以降、日本では道北のサロベツ原野で、20つがい前後が確認されるのみです。

減少の要因は、渡りの中継地の中国や越冬地の中国南部、東南アジア等での密猟と生息環境の悪化と考えられています。現在は、(公財)日本野鳥の会がメンバーであるバードライフインターナショナルと協力し、ロシア、モンゴル、中国、韓国、香港など各国の研究者と協力して保全活動に取り組んでいます。



ウトナイ湖のシマアオジ
2005年6月7日撮影



ウトナイ湖におけるシマアオジの出現率の変化
提供:(公財)日本野鳥の会

オオジシギ *Gallinago hardwickii* チドリ目シギ科 (環境省: 準絶滅危惧、北海道: 準絶滅危惧)

北海道の草原では夏鳥として普通に繁殖していますが、国内でも世界的にも分布が限られていて個体数が少ない鳥です。ウトナイ湖には4月下旬頃渡来し、繁殖します。上空で「ズビャーク、ズビャーク」と大きな声で鳴きながら、急降下や急上昇を繰り返す、非常ににぎやかなディスプレイを行います。ウトナイ湖の南にある弁天沼では、2001年の標識調査によって合計400羽以上が確認されており、特に秋の渡りの中継地として集まることが知られています。

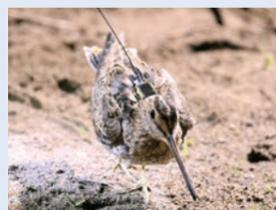
越冬地はオーストラリアなど南半球ですが、(公財)日本野鳥の会による2016年の衛星追跡調査では勇払原野で出発後1週間で5,000km以上離れたニューギニア島まで渡ったことが確認されました。また、2020年に道内5地域で実施した個体数調査の結果、個体数は推定2万羽程度で2018年と比べると約42%も減少していることが判明しました。減少の原因は、越冬地であるオーストラリアの異常気象の影響と考えられています。



衛星追跡で明らかになった
オオジシギの渡りルート
提供:(公財)日本野鳥の会



オオジシギ



衛星追跡装置を付けた
オオジシギ
提供:(公財)日本野鳥の会

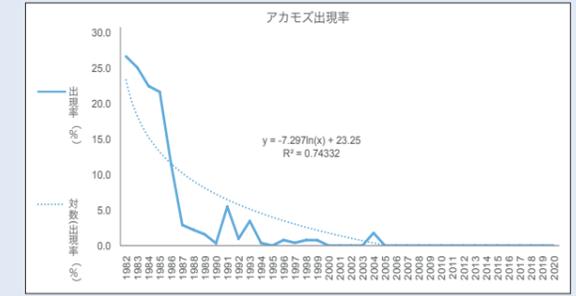
アカモズ *Lanius cristatus* スズメ目モズ科 (環境省: 絶滅危惧ⅠB類・国内希少野生動物種、北海道: 絶滅危惧ⅠB類)

北海道から九州の原野、灌木のある草原などで繁殖し、東南アジア等で越冬する夏鳥です。かつては生息地で普通に見られましたが、1990年代以降に急激な個体数・分布域の減少が報告され始め、2020年には研究者によって過去100年で分布域が90%以上減少*したことが報告されました。国内における現在の個体数は332個体と推定*されています。ウトナイ湖周辺では2004年以降、確認されなくなりましたが、勇払原野では毎年2~4つがいを確認しています。

*北沢宗大ほか(2020)「絶滅危惧鳥類アカモズの危機的状況を明らかに」北海道大学プレスリリースより



アカモズ



ウトナイ湖におけるアカモズの出現率の変化
提供:(公財)日本野鳥の会

チュウヒ *Circus spilonotus* タカ目タカ科

(環境省: 絶滅危惧ⅠB類・国内希少野生動物種、北海道: 絶滅危惧ⅠB類)

主に北日本の草原、湖沼や湿原のヨシ原などで繁殖し、本州中部以南で越冬します。(公財)日本野鳥の会が2018年から2020年に行った調査では、国内で繁殖しているつがいは136つがいのみ。勇払原野では20つがいが繁殖、そのうち6つがいはウトナイ湖周辺で繁殖していると推定され、日本の重要な繁殖地のひとつと考えられています。

現在、勇払原野東部では風力発電事業が計画されており、チュウヒの生息環境に影響を及ぼす恐れがあることから、(公財)日本野鳥の会は事業者や行政に事業の見直しを求めています。



チュウヒ



タンチョウ
提供:(公財)日本野鳥の会

タンチョウ *Grus japonensis* ツル目ツル科

(文化庁: 特別天然記念物、環境省: 絶滅危惧Ⅱ類、北海道: 絶滅危惧Ⅱ類)

日本では北海道東部を中心に生息し、国内で唯一繁殖するツルの仲間です。湿原のヨシ原の中に直径約1mの大きな巣を造ります。これまで道東に限られていた繁殖地が、近年徐々に道内各地に広がってきています。

2013年以降、ウトナイ湖の南の弁天沼周辺などで継続して観察されていましたが、2020年5月26日、ウトナイ湖でヒナ1羽を含む3羽の親子が確認されました。今後もウトナイ湖やその周辺で繁殖する可能性は高く、北海道西部における個体数や分布が広がる土台となる場所になっていく可能性があります。

(2) 植物

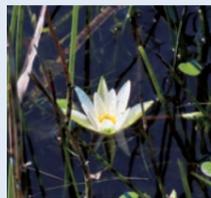
ウトナイ湖とその周辺の植物は約450種類、コケ類などがあわせて約60種類が確認されています。

湖内にはマコモ、フトイ、コウホネなどの水生植物が繁茂し、イトイバラモやエゾミクリなどの希少種も見られます。周辺にはヨシやスゲなどで形成される草地やハンノキ林が湖岸に沿うように分布し、その周囲にはコナラやミズナラの林が広がっています。また、ヨシなどの草地とハンノキ林の間には、ホザキシモツケやエゾリンドウなどの多様な種類の植物が見られる高茎湿生草原が分布しています。さらに南東部の砂丘には、山地性や海岸性、高山性の植物が共生する特異な景観が見られます。

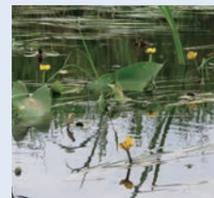
ウトナイ湖の植物は、これら様々な特性を持つ自然植生がまとまって残されており、きわめて多様性が高いという特徴があるのです。

○水生植物

ウトナイ湖の水生植物は、1930年以降約30種類が確認されています。水深の深い方から浅い方へセキショウモ→ヒシ→コウホネ→マコモ→フトイ→スギナモなど多様な群落（それぞれがまとまって分布している様子）が見られ、絶滅危惧種であるイトイバラモを始めとした多くの希少種も見つかっています。しかし近年、希少種の分布は縮小し、多様な群落も大部分がホザキノフサモとセキショウモに置き換わっており、植生の単調化が心配されています。



ヒツジグサ



コウホネ

○ヨシ原

ウトナイ湖の北側の湖岸付近や美々川では、水位が不安定で大雨のたびに急速な水位の上昇によって水没するような場所にヨシやスゲの仲間が草原（ヨシ原）を作ります。また、湿地の植物であるモウセンゴケやミズゴケも点在しています。ヨシ原は、ノビタキやコヨシキリ、オオジュリンといった草原性の鳥類の大切な繁殖場所になっています。



ウトナイ湖北岸のヨシ原

○ハンノキ林

ウトナイ湖のヨシ原の背後にはズミなどの木と混生するハンノキの林が広がっています。ハンノキは平地の湿った場所を好み、湿原の景観を特徴づける重要な木であり、ウトナイ湖や美々川の湿原でも広範囲に見られます。

ハンノキは後述の湿生草原の分布を制限したり、根の根粒によって固定した窒素を湿原に供給することで富栄養化をおこしたりなど、湿原の生態系に大きな影響力を及ぼしています。



ハンノキ



ズミ



ハンノキの雄花

○高茎湿生草原

ウトナイ湖のヨシ原の背後にはハンノキやズミの林が広がっていますが、その背後には高さ1mほどの植物の草原が見られます。ヨシ原よりやや乾いた場所に成立する草原で、高茎湿生草原と呼ばれています。

この草原にはナガボノワレモコウ、ヒオウギアヤメ、エゾリンドウ、ホザキシモツケなどの草花が豊富に生え、湿原全体の種の多様性を高めるとともに「湿原らしい」景観を作っています。



ウトナイ湖北岸の高茎湿生草原



ヒオウギアヤメ



ナガボノワレモコウ



サワギキョウ



ヤナギトラノオ



ホザキシモツケ



コバギボウシ

○コナラ・ミズナラ林

湖岸から離れると、陸の植物はドングリを付けるミズナラやコナラが主体となった林に変わります。林の木々にはシラカンバやミヤマザクラと言った種類も多く混じり、早春にはキタコブシやナニワズが咲き、初夏には多くの森林性の夏鳥が渡ってきます。北岸では乾燥化に伴って、ミズナラ・コナラ林が広がりがつたことが分かっています。



散策路沿いのコナラ・ミズナラ林



コナラ



キタコブシ



フデリンドウ



ミヤマザクラ



ナニワズ



フッキソウ

○南東部砂丘（苫小牧市自然環境保全地区）

ウトナイ湖の南東部には、海から湖になる過程で形成されたと考えられる砂丘が広がっている場所があります。ここにはハナゴケの群落が地表を覆う砂地に、ハマナスやハマハタザオなど海岸に生える植物と、イワブクロなどの高山性の植物が共存する他では見られない植物の特徴を持つ場所です。

近年は森林の樹木が侵入し、イワブクロが見られなくなるなど、その環境が変わりつつあると考えられています。



ウトナイ湖南東部に広がる砂丘



イワブクロ



ハマナス



ハマハタザオ

(3) 昆虫

○これまで確認された昆虫は約4,000種！

過去の調査によって、ウトナイ湖とその周辺地域で確認された昆虫は約4,000種類に達しています。特に水生昆虫や地表をすみかとする甲虫の種類と数が多いことが注目されます。たとえばオサムシの間では、北海道にすむ16種類中13種、トンボ類では74種中39種がこの地域で発見されています。



○北方系と南方系、両方の種類が生息

ウトナイ湖とその周辺の昆虫の最も重要な特徴は、^{ほっほうけい}北方系の昆虫と^{なんぽうけい}南方系の昆虫の境界に位置し、両方の種類が生息していることです。北方系の昆虫としては、北海道の特産種であるセズアカガネオサムシや、ウトナイ湖に流入する河川沿いの湿地で確認されている希少種であるイイジマルリボシヤンマがいます。南方系の昆虫としては、南東部の砂丘が数少ない生息地となっているカワラハンミョウなどがいます。



セズアカガネオサムシ
Carabus maeander paludis コウチュウ目オサムシ科

日本では北海道にしかない湿原を好むオサムシ。ウトナイ湖周辺は道央で残された生息地です。乾燥化により減少している可能性が指摘されています。

所蔵：堀 繁久



イイジマルリボシヤンマ
Aeshna subarctica subarctica トンボ目ヤンマ科
(環境省：準絶滅危惧種、北海道：希少種)

国内では北海道に分布しますが、生息地は限られています。苫小牧市は本種の南限であり、ウトナイ湖近くの湿地トキサタマップ湿原に生息していましたが、近年は確認されていません。

所蔵：堀 繁久



カワラハンミョウ
Chaetodera laetescripta コウチュウ目ハンミョウ科
(環境省：絶滅危惧 I B類、北海道：絶滅危惧 II類)

ウトナイ湖の南東部にある砂丘に生息しています。近年、北海道全体でも生息地が減少しており、ウトナイ湖の砂丘でも確認されることはほとんどなくなってしまいました。

所蔵：堀 繁久

ウトナイ湖の南東部砂丘で採集された標本

○昆虫は減少している？

希少種あるいは分布上の重要種が生息しているということは、ウトナイ湖とその周辺地域が沼、湿原、草原、砂丘、広葉樹林など変化に富む多様な環境を持つことを示しています。現在、ウトナイ湖とその周辺に生息する昆虫は、環境の変化などで減少していると考えられています。特に乾燥化によって湿地性の昆虫が減って、森林性の昆虫が増えてきている可能性があります。昆虫は多くの生き物のエサになるため生態系で重要な役割を担っており、その変化は他の生き物への影響も懸念されます。



タガメ
Kirkaldyia deyrolli カメムシ目コオイムシ科
(環境省：絶滅危惧 II類、北海道：絶滅危惧種)

国内最大の水生昆虫。写真の標本は、ウトナイ湖ではありませんが、周辺の湿地で採集された標本です。北海道での採集の記録は4例しかなく、展示した標本は、北海道にタガメがいたことを示す貴重な標本です。

当館蔵

1979年に苫小牧沼ノ端(右)、
1980年に苫小牧市静川(左)で採集された標本



ヘイケボタル
Luciola lateralis コウチュウ目ホタル科

北海道に生息するホタルで光るのは本種だけです。湿原を好み、30年ほど前の調査ではウトナイ湖や美々川の各地で多く確認されていましたが、近年は減少していると考えられています。

所蔵：堀 繁久

(4) 魚類

ウトナイ湖とその周辺に生息する魚類は、これまで30種類ほど確認されています。北海道の平地の沼などで普通に見られる種類が多く、その中にはエゾホトケドジョウなどの絶滅危惧種も含まれています。

ウトナイ湖につながる河川ではサケの遡上も確認されています。明治時代には美々川でサケ漁が行われており、昭和に入るとふ化事業も始まっています(戦後間もなく終了)。当時の記録によれば、大量のサケが遡上し、幻の大魚「イトウ」もウトナイ湖から流れ出る勇払川に生息していたことが分かっています。

ウトナイ湖や河川にはトゲウオの仲間やカジカの仲間など、目立たない小魚も多くすんでいます。一生を淡水で暮らす魚もいますが、一生の一時期を海で暮らす魚も少なくありません。また、カジカやハゼの仲間は水底、コイやトゲウオの仲間は中層から表層を泳ぐなど、それぞれ好む環境ですみ分けています。

近年、釣りなどの目的で放流されたナマズやコイ、ソウギョなど多くの外来種がウトナイ湖や美々川に定着しています。さらに、ウトナイ湖は水位低下による水草の変化や、周辺の開発などの影響による水質の悪化が指摘されており、在来種の影響が心配されています。



昭和35年(1960年)に勇払川で釣られたイトウの魚拓
当館蔵



トミヨ属汽水型(トゲウオ科)

(5) ほ乳類

北海道のほ乳類は、本州との間にある津軽海峡を境界として、本州より南のほ乳類とは大きく異なっています。その反面、北方のサハリンやシベリアのほ乳類と同じ種類のものが多いです。ウトナイ湖とその周辺のほ乳類について分かっていることは多くありませんが、コウモリ類を除いて記録されているほ乳類は20種類に達しています。

なかでもヒグマは、研究によってウトナイ湖周辺が生活のための重要な移動ルートであることが分かっています。また、テンは本州からの外来種であるキテンが北海道の南西部から徐々に東へと進出し、ウトナイ湖を含む石狩低地帯の西縁部に到達している可能性が示されています。

食物連鎖の上に位置するほ乳類の種類が多いことは、豊かな生態系が存在する証拠でもあります。森林伐採や植林などで森林が単調化すると、ほ乳類の種類も単純化することが分かっており、変化の兆しを見落とさないためにも、ほ乳類の調査研究の進展が望まれています。



エゾヤチネズミ



エゾシマリス



エゾシカ



キタキツネ

ウトナイ湖をヒグマが通った！胆振から日高への移動ルート

ヒグマは1996年に発信機をつけた調査によって、ウトナイ湖周辺を往来する個体の行動が明らかになっています。

森林が広がっていた開拓初期、ヒグマはウトナイ湖周辺を自由に行き来しており、開発が進んだ現在は往来できなくなったと考えられていました。ところが発信機を付けた「トラジロウ」と名付けられたヒグマは、樽前山からウトナイ湖周辺を経由して早来、穂別へと移動し、再び樽前山に戻って越冬したのです。この間、ウトナイ湖近くの高速道路のアンダーパスや国道36号線も横断していたトラジロウは、この地域に残された連続する森林や灌木林を巧みに利用していました。ウトナイ湖周辺の森林は、日高と胆振をつなぐヒグマの回廊（コリドーと呼ばれる）として機能している可能性が示されたのです。コリドーを残すということは、ヒグマが安全に移動でき、人との無意味な遭遇を減らすという意味でも大変重要なことなのです。

近年、ヒグマの行動や分布の変化が取りざたされています。様々な要因が考えられますが、私たちの知らないところでコリドーの破壊や分断が起こっていないかについても、考える必要があります。



ヒグマのはく製
(※トラジロウではありません)



トラジロウの年ごとの行動圏と冬眠穴位置
青井俊樹(2005)「トラジロウのコリドーとその後」モーリー13号より

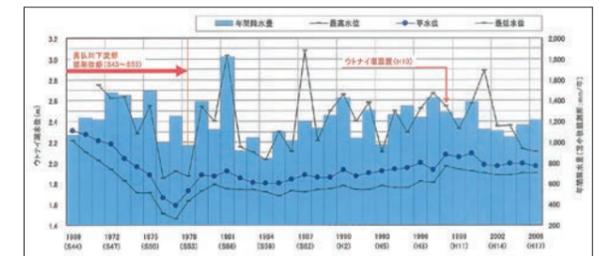
4. ウトナイ湖の問題

ウトナイ湖を含む美々川や勇払川の周辺は、産業を発展させるために大規模な港湾や工業用地の造成が進められてきた地域です。1968年からはじまった洪水対策や土地利用による川の工事のため、ウトナイ湖では1966年から1977年にかけて水位が2.3mから1.6mまで急激に低下しました。その影響でハンノキ林の増加と湿地を好む植物の減少、南東部砂丘の環境の変化などが起きたと考えられています。

ウトナイ湖の自然環境の保全と水位の低下を防ぐため、1998年にウトナイ湖から水が出ていくのをせき止める「ウトナイ堰」が設置され、現在は2.0mほどの水位で維持されています。



1960年代 現在
勇払川下流部の改修(1968年～1978年)
川が直線化され、幅も広げられた。
出典：国土地理院撮影の空撮写真に加筆



ウトナイ湖の水位の変化
北海道室蘭土木現業所(2007)
「美々川自然再生計画書～水環境と地域の共生に向けて～」より



ウトナイ堰の設置(1998年)
ウトナイ湖から出ていく水量を調節している
提供：北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部

ウトナイ湖の湖岸では水位の低下によって乾燥化が進んでいます。航空写真により1975年から2009年までの植物の変化を調べた研究によると、湿地の植物の激しい変化が明らかになりました。

1960年代以前、湖岸にはヨシやスゲなどの草原、その背後にはエゾリンドウやヒオウギアヤメなど多くの種類の植物が優占し、湿原の種の多様性や景観を高める高茎湿生草原と呼ばれる草原が広がっていました。しかし、高茎湿生草原は34年の間に79.20%減少し、反対に少し乾いた土地に生えるハンノキとホザキシモツケの林は90.54ha増加しました。これらの変化は、水位の低下による乾燥化によって、ハンノキやホザキシモツケが高茎湿生草原の植物たちを駆逐してしまった結果であると考えられています。植物の急激な変化は2002年頃落ち着いたとみられますが、ホザキシモツケは今でも拡大を続けています。



1975年



2015年

ウトナイ湖とその周辺の植生図

金井紀暁・矢部和夫・金子正美(2011) 空中写真判読による1975年と2009年の間に起こったウトナイ湖とその周辺地域の植生変動の解析. 札幌市立大学研究論文集より

このようなウトナイ湖の湖岸の植生の変化によって、鳥類ではオオジュリンやホオアカといった草原性の種類の減少と、キビタキやセンダイムシクイといった森林性の種類の増加が報告されており、他の生物にも影響を与えていることが考えられています。

また、ウトナイ湖に流入する美々川の水の硝酸窒素イオン（水質の指標となる物質）の濃度は、平成13年頃まで増加傾向でしたが、鶏糞の処理施設の運用開始によってその上昇はほぼ横ばいになりました。しかし、依然として高い濃度になっています。さらに近年は、湧水量の減少、クサヨシの拡大による開放水面の減少など様々な問題が出てきています。

ウトナイ湖は、美々川など流入する河川や地下水、湧き水など広範囲の多様な水環境によって成り立っている湖です。その周りは住宅地や農地も近く、空港や国道、鉄道も通っており、私たちの生活にも密接に関わる場所です。ウトナイ湖の豊かな自然環境を未来に残せるのか、私たちのこれからの関わり方にかかっています。

5. ウトナイ湖と周辺の歴史・出来事

年代	公共事業・行政の動き	年代	レジャー	年代	民間等の自然保護の動き
明治～大正	<ul style="list-style-type: none"> 札幌新道（現在の国道36号）が開通。 1878年 美々鹿肉缶詰製造所の操業（御前水） 美々川周辺でマッチ軸木製造工場が多く建設される。 林業の木材運搬。明治時代は箱舟でウトナイ沼を経て勇払川沼ノ端駅付近で陸揚げして運ぶ。大正時代になると、ウトナイ沼で陸揚げし、沼ノ端まで馬鉄で運ぶ。 昭和初期まで製炭が盛んになる。 				
昭和	<p>1958年 ウトナイ遊園地が開業</p> <p>1960年 苫小牧市、ウトナイ湖ユースホステルを開業 ウトナイ観光ホテルオープン</p> <p>1964年 北海道、洪水対策のため勇払川の安平川合流点から上流側の河川改修工事に着手</p> <p>1965年 ウトナイ湖が道設の鳥獣保護区に指定される</p> <p>1969年 苫小牧東部大規模工業基地開発計画案決定</p> <p>1974年 「苫小牧市自然環境保全条例」公布 苫小牧市自然環境保全審議会発足</p> <p>1977年 苫小牧市が「ウトナイ湖自然環境調査報告書」を発行する</p> <p>1978年 道央自動車道（千歳-苫小牧東）開通</p> <p>1982年 千歳川放水路計画が決定する ウトナイ湖が国設（現在は国指定）鳥獣保護区（特別保護地区）に指定される</p> <p>1985年 水産庁北海道さけ・ますふ化場千歳支場は、ベニザケ稚魚の放流を美々川で行う</p> <p>1988年 新千歳空港開港</p>	<p>1959年 折居彪二郎、林野庁の依頼でウトナイ湖の鳥獣の観察調査を行う</p> <p>1960年 苫小牧郷土文化研究会が設立。ウトナイ湖でハクチョウ調査始まる</p> <p>1961年 苫小牧市白鳥保護委員会が発足する</p> <p>1966年 苫小牧東高校生物部の生徒によるウトナイ湖の自然環境の調査が実施され、1967年に「ウトナイ湖総合調査報告書」を発行する 勇払川でアイヌの丸木舟が発見される</p> <p>1971年 苫小牧郷土文化研究会、美々・勇払川流域調査を実施する</p> <p>1972年 苫小牧自然保護協会設立</p> <p>1974年 ウトナイ湖や美々川周辺でゴルフ場の開場が進む 以後、20年間ほど本格化</p> <p>1978年 ウトナイ湖南東部砂丘の調査が実施される（1979年、1988年にも実施）</p> <p>1979年 日本野鳥の会苫小牧支部設立</p> <p>1981年 国内初の野鳥の聖域「ウトナイ湖サンクチュアリ」が開設</p> <p>1984年 日本野鳥の会は苫小牧市の委託により「ウトナイ沼自然環境調査」を実施する</p>	<p>1991年 ウトナイ湖と周辺510haがラムサール条約登録湿地に認定される</p> <p>1994年 (財)日本野鳥の会が「ウトナイ沼環境保全基本計画検討調査報告書」を発行する</p> <p>2005年 ウトナイ湖ユースホステル閉鎖</p> <p>2009年 道の駅ウトナイ湖開設</p> <p>2018年 苫小牧市「苫小牧国際リゾート構想」を策定する</p> <p>2019年 ウトナイ湖展望台設置</p>		
平成	<p>1994年 勇払川をトキサタマップ川と合流させてウトナイ湖へ流入させる切替工事を実施（1997年に完了） 国指定鳥獣保護区指定期間の20年延長</p> <p>1998年 ウトナイ堰の運用を開始する</p> <p>1999年 千歳川放水路計画中止 苫小牧東部開発（株）経営破たん、株式会社「苫東」設立</p> <p>2002年 美々川自然再生事業開始 ウトナイ湖野生鳥獣保護センター開設</p>	<p>1995年 ウトナイレイクホテル閉鎖（旧ウトナイ観光ホテル）</p> <p>2005年 ウトナイ湖ユースホステル閉鎖</p> <p>2009年 道の駅ウトナイ湖開設</p> <p>2019年 ウトナイ湖展望台設置</p>	<p>2006年 日本野鳥の会がウトナイ湖を含む勇払原野の保全構想を策定 東アジア・オーストラリアフライウェイパートナーシップ参加</p>		

引用・参考文献

- 全体**
- ウェットランドセミナー100回記念出版編集委員会編(2017)湿地の科学と暮らし。北海道大学出版会、
 - 大畑孝二(1994)ウトナイ湖の自然と千歳川放水路問題。パネルディスカッション「千歳川放水路計画を考える」礼弁リブレット第1号;43-47.
 - 苫小牧市(1980)ウトナイ沼南東部自然環境調査報告書。苫小牧市、
 - 苫小牧市(1987)ウトナイ沼自然環境調査報告書。苫小牧市、
 - 苫小牧市(1989)ウトナイ沼南東部自然環境調査報告書。苫小牧市、
 - 苫小牧市(1993)ラムサール条約登録湿地指定記念誌 ウトナイ湖。苫小牧市、
 - 苫小牧東高校生物研究部(1967)ウトナイ総合調査報告書。苫小牧東高校生物研究部、
 - (財)日本野鳥の会(1985)苫小牧市委託 ウトナイ沼自然環境調査報告書。苫小牧市、
 - (財)日本野鳥の会(1993)ウトナイ沼環境保全基本計画検討調査報告書。(財)日本野鳥の会、
 - (財)日本野鳥の会(1994)ウトナイ沼環境保全基本計画検討調査報告書。(財)日本野鳥の会、
 - (財)日本野鳥の会(2006)ウトナイ湖・勇払原野保全構想報告書。(財)日本野鳥の会、
 - (公財)日本野鳥の会(2021)ウトナイ湖サンクチュアリ40周年記念特集。野鳥5・6月号 852;1-15.
 - 北海道博物館(2021)あっちこっち湿地へ自然と歴史をめぐる旅〜GUIDE BOOK.北海道博物館、
 - 北海道室蘭土木現業所(2007)美々川自然再生計画書〜水環境と地域の共生に向けて〜。北海道室蘭土木現業所、
 - 北海道保健環境部(1992)美々川流域の自然環境の質実と現状(美々川流域自然環境調査報告書)。北海道保健環境部、
 - 村井雅之(2008)ムラさんのゆうふつ原野の絵日記。一耕社出版、
 - 村井雅之(2012)勇払原野における環境教育とエコツアーの実践。湿地研究 2;39-42

1ラムサール条約登録とウトナイ湖

- 大畑孝二(2004)ラムサール条約登録湿地としてのウトナイ湖。モーリー 11;32-35.
- 環境省ホームページ「ラムサール条約と条約湿地」 https://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/About_RamarConvention.html.参照 2021-09-20.
- 苫小牧市ホームページ「ウトナイ湖について」 https://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/shizen/shizenhgo/utonaiko/ramusar.html.参照 2021-09-20.

2ウトナイ湖の成り立ち

- 池田国昭・羽坂保一・村瀬正(1995)北海道勇払平野の完新統分布と地形発達。地質調査所月報46(5);283-300
- 矢部和夫(1997)勇払平野の湿原地域の変遷。北海道の湿原の変遷と現状の解析―湿原の保護をすすめるために―。財団法人自然保護助成基金1994-1995年度研究助成報告書 79-81.

展示資料リスト ※ 展示した生物の資料はウトナイ湖で確認されていない種類も含みます。

1ラムサール条約とウトナイ湖

展示品名	資料の種類	点数	所蔵・提供
キングロハジロ (♂)	剥製	1	苫小牧市美術博物館
キングロハジロ (♀)	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ホオゾロガモ (♂)	剥製	1	苫小牧市美術博物館
カルガモ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ヒドリガモ (♂)	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ヒドリガモ (♀)	剥製	1	苫小牧市美術博物館
コガモ (♂)	剥製	1	苫小牧市美術博物館
コガモ (♀)	剥製	1	苫小牧市美術博物館
オジロワン	剥製	1	苫小牧市美術博物館
オオハクチョウ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
コハクチョウ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ウミウ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
オナガガモ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
アオサギ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
カワアイサ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
マガモ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
バン	剥製	1	苫小牧市美術博物館
アジサシ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ミコアイサ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
オオジシギ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ウミネコ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
クイナ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
カワセミ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
カイツブリ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
アカエリヒレアシシギ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
イカルチドリ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ヒバリシギ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
チゴハヤブサ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ミヤマカケス	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ハイタカ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
コミミズク	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ノスリ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
オオタカ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
トビ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ハシブトガラ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
シマセンニュウ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ベニマシコ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ヤマシギ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
コゲラ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
アリスイ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ヤブサメ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ピンズイ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
アオジ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
モズ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
アカハラ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
アララギ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
トラツグミ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
アオバト	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ツドリ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
フクロウ	剥製	1	苫小牧市美術博物館
オオワン	剥製	1	苫小牧市美術博物館
オオヒシクイ	剥製	1	苫小牧市美術博物館

3ウトナイ湖とその周辺に生息する動植物

- (1)**鳥類**
- 大畑孝二(1990)ウトナイの鳥類。日本の生物 12(4);16-25.
 - 中村聡 (2015) 勇払原野、ウトナイ湖の鳥たち。北海道の自然（北海道自然保護協会会誌） 53;19-27.
 - 日本鳥学会(2012)「日本鳥類目録 改訂第7版」。日本鳥学会、
 - (公財)日本野鳥の会ホームページ「シマアオジの調査・保護活動」 https://www.wbsj.org/activity/conservation/endangered-species/ea-hogo/.参照 2021-09-10
 - (公財)日本野鳥の会(2020)絶滅危惧鳥類「チュウヒ」の全国繁殖つがいが数か明らかに〜全136つがいで、国内最小のツカ科鳥類であることが判明。(オンライン) https://www.wbsj.org/activity/press-releases/press-2020-12-10/.参照 2021-09-15
 - 北沢宗大・先崎理之・松宮裕秋・原星一(2020) 絶滅危惧鳥類アカモズの危機的状況を明らかに〜日本国内の繁殖個体数と繁殖分布域の縮小の程度を初めて算出〜。北海道大学プレスリリース(オンライン) https://www.hokudai.ac.jp/news/2020/11/post-757.html.参照 2021-09-15.

- (2)**植物**
- 環境省自然環境局(2018)ウトナイ湖サイト(水生植物調査)。平成29年度モニタリングサイト1000陸水域調査報告書;12-22.
 - 中居正雄(2000)「とまこまの植物」.苫小牧民報社、
 - 矢部和夫・渡辺紀元・岸政実(1990)ウトナイの植生とハンノキ。日本の生物 12(4);34-41.

- (3)**昆虫**
- 西島浩(1990)ウトナイ沼周辺の昆虫―地表性甲虫と湿原性昆虫を中心に―。日本の生物 12(4);26-33.
 - Sakurai Y, Yabe K, Katagiri K (2017) Factors controlling changes in the aquatic macrophyte communities from 1984 to 2009 in a pond in the cool-temperate zone of Japan. Limnology 18(2);153-16

- (4)**魚類**
- 環境省自然環境局(2019)ウトナイ湖サイト(淡水魚類調査)。平成30年度モニタリングサイト1000陸水域調査報告書;51-60.
 - 青井俊樹(2002)石狩低地帯で発見されたヒグマのコリドーとその保全。林北支論50.1-3.
 - 青井俊樹(2005)トラジロウのコリドーとその後。モーリー13;14-17.
 - 平川浩文・木下豪太・坂田大輔・村上隆広・車田利夫・浦口宏二・阿部豪・佐藤万里子(2015) 拡大・縮小はどきどき進んだか―北海道における在来種クローンと外来種ニホンテンの分布―。哺乳類科学 55(2);155-166.

4ウトナイ湖の問題

- 金井紀興・矢部和夫・金子正実(2011)空中写真判読による1975年と2009年間に起こったウトナイ湖とその周辺地域の植生変動の解析。札幌市立大学研究論文集5(1);35-44
- 余貴典昭(2008)窒素安定同位体比による美々川の硝酸窒素イオン汚染源に関する研究。一般社団法人北海道河川財団研究所紀要19.

展示品名	資料の種類	点数	所蔵・提供
マンガン	剥製	1	苫小牧市美術博物館
ラムサール条約湿地登録認定証	実物	1	苫小牧市秘書広報課
苫小牧市から北海道に向けた登録のための要望書	実物	1	苫小牧市美術博物館
ラムサール条約湿地登録記念誌	実物	1	苫小牧市美術博物館
登録記念式典のパンフレット	実物	1	苫小牧市美術博物館
登録を記念して作られた記念品	実物	3	苫小牧市美術博物館

IIウトナイ湖の自然とその変化

展示品名	資料の種類	点数	所蔵・提供
炭化木	実物	1	苫小牧市美術博物館
樽前山噴火による火山灰（軽石）	実物	1	苫小牧市美術博物館
泥炭	実物	1	苫小牧市美術博物館
植 物			
ヒツジグサ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ミクリ科の一種	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
コウホネ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
シワスレナグサ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
エゾミソハギ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ミゾソバ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ツボスミレ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ヒオウギアヤメ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ノハナショウブ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
コバギボウシ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
アカネムグラ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
サワギキョウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
エゾキスゲ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ナガボウフレモコウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
エゾリンドウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ハッコヤナギ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ヤチヤナギ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ホザキンモツケ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ズミ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ハンノキ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
フッキソウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ナニワズ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ミヤマザクラ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
キタコブシ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ハナゴケ.sp	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ハナイカリ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ハマナス	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ハマハタザオ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
フクジュソウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
フデリンドウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
タチソブスミレ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ミツバツチグリ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
カンボク	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ハマエンドウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ツルウメモドキ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
カラコギカエデ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
センダングハギ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ノリウツギ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
エゾフウランデシコ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
エゾスカシユリ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
エゾフウロ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館

展示品名	資料の種類	点数	所蔵・提供
ウツボグサ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
トモエソウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
クサレダマ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ナミキソウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
エゾノサワアザミ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ガガイモ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ツリガネニンジン	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ナウシロイチゴ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
カセソウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
オトギリソウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
キツリフネ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
エゾノショウコ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ツリフネソウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
イヌゴマ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
キンミズヒキ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ネジバナ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ハンゴンソウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
クルマバナ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ユキザサ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
マイヅルソウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ハナニゴナ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
エゾノカラマツバ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
コウゾリナ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ノコギリソウ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ヒヨドリバナ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
オニユリ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
セリ科の一種	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
オトコエシ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ヤナギタンポポ	乾燥	1	苫小牧市美術博物館
ユウゼンギク	乾燥	1	苫小牧市美術博物館

昆 虫			
タガメ	標本	2	苫小牧市美術博物館
イジマルリボシヤンマ	標本	2	堀繁久
セズアカガネオサムシ	標本	4	堀繁久
カワラハミョウ	標本	4	堀繁久
ヘイケボタル	標本	4	堀繁久
モンキマゲンゴロウ	標本	5	苫小牧市美術博物館
コップゲンゴロウ	標本	6	苫小牧市美術博物館
シマケシゲンゴロウ	標本	7	苫小牧市美術博物館
クヒメゲンゴロウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ゲンゴトコップゲンゴロウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
スゴロウモドキ	標本	2	苫小牧市美術博物館
ゲンゴロウ	標本	2	苫小牧市美術博物館
ガムシ	標本	2	苫小牧市美術博物館
クロマゲンゴロウ	標本	5	苫小牧市美術博物館
ケブリクヒメゲンゴロウ	標本	8	苫小牧市美術博物館
ヒメゲンゴロウ	標本	19	苫小牧市美術博物館
アメンボの仲間	標本	32	苫小牧市美術博物館
ミズカマキリの仲間	標本	11	苫小牧市美術博物館
ミズスマシの仲間	標本	91	苫小牧市美術博物館
マツモシの仲間	標本	24	苫小牧市美術博物館
コイムシの仲間	標本	9	苫小牧市美術博物館
オサムシの仲間	標本	175	苫小牧市美術博物館
ドウガネブイブイ	標本	27	苫小牧市美術博物館
コガネムシ科の一種	標本	103	苫小牧市美術博物館
スジコガネ	標本	16	苫小牧市美術博物館
ダイコクコガネ	標本	7	苫小牧市美術博物館
サクログコガネ	標本	18	苫小牧市美術博物館
ヒメコガネ	標本	94	苫小牧市美術博物館
カミキリムシの仲間	標本	203	苫小牧市美術博物館
オオヤマトンボ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ギンヤンマ	標本	1	苫小牧市美術博物館
オオルリボシヤンマ	標本	1	苫小牧市美術博物館
コオニヤンマ	標本	1	苫小牧市美術博物館
アキアカネ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ノシメトンボ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ミヤマアカネ	標本	1	苫小牧市美術博物館
リスアカネ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ヨコタテアカネ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ムツボシトンボ	標本	1	苫小牧市美術博物館
エゾトンボ	標本	1	苫小牧市美術博物館
コエリンドウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
エゾアオイトトンボ	標本	1	苫小牧市美術博物館
シオカラトンボ	標本	1	苫小牧市美術博物館
シオヤマトンボ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ニホンカワトンボ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ミヤマカラスアゲハ	標本	1	苫小牧市美術博物館
カラスアゲハ	標本	1	苫小牧市美術博物館
アゲハ	標本	2	苫小牧市美術博物館
アカゲハ	標本	2	苫小牧市美術博物館
ウエバシロチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
イチモンジチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
フタスジチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ヒメアカタテハ	標本	1	苫小牧市美術博物館
クジャクチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
コムラサキ	標本	1	苫小牧市美術博物館
アカマダラ	標本	1	苫小牧市美術博物館
サカハチチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
シントクテハ	標本	1	苫小牧市美術博物館
キマダラモドキ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ジャノメチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ウラジャノメ	標本	1	苫小牧市美術博物館
シロオビヒメヒカゲ	標本	1	苫小牧市美術博物館
クロヒカゲ	標本	1	苫小牧市美術博物館
サトキマダラヒカゲ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ヤマキマダラヒカゲ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ヒョウモン	標本	1	苫小牧市美術博物館
ヒョウモンチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館

展示品名	資料の種類	点数	所蔵・提供
ウラギンスジヒョウモン	標本	1	苫小牧市美術博物館
オオウラギンスジヒョウモン	標本	1	苫小牧市美術博物館
メスグロヒョウモン	標本	1	苫小牧市美術博物館
ミドリヒョウモン	標本	1	苫小牧市美術博物館
ギンボンヒョウモン	標本	1	苫小牧市美術博物館
ウラギンヒョウモン	標本	1	苫小牧市美術博物館
アイノミドリシジミ	標本	4	苫小牧市美術博物館
エゾミドリシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ジョウザンミドリシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
オオミドリシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ミドリシジミ	標本	2	苫小牧市美術博物館
ハヤシミドリシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ルリシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ヒメシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ツバメシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
トラフシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
コツバメ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ウラゴマグラシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
アカシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ベニシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ミズイロオナガシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ウラケンシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
カラスシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ゴイシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ゴマシジミ	標本	1	苫小牧市美術博物館
スジグロンチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
エゾスジグロンチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
モンシロチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
オオモンシロチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ツマキチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
ヒメシロチョウ	標本	1	苫小牧市美術博物館
エゾシロチョウ</			

展示風景



ウトナイ湖を訪れる渡り鳥の展示



希少な昆虫の標本



昆虫や魚類などを紹介したコーナー



エントランス



植物の立体乾燥標本



第2展示室



ガンの大群の動画



第1展示室全景



ウトナイ湖の歴史をたどる展示



ウトナイレイクホテルゆかりの資料

本展の開催および本報告書の執筆にあたり、下記の各機関ならびに各位よりご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

●協力機関

一耕社、ウトナイ湖野生鳥獣保護センター、紙の街の小さな新聞社ひらく、公益財団法人日本野鳥の会
ウトナイ湖サンクチュアリ、ダジック・チーム（京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地球科学輻
合部）、北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部、北海道大学植物園・博物館、北海道博物館、CISEネッ
トワーク

●協力者

青井俊樹、安西英明、大泉博嗣、大畑孝二、小玉愛子、新沼友啓、堀繁久、矢部和夫、横山透

（敬称略、50音順）

企画展

ラムサール条約登録30年
ウトナイ湖・うつりゆく自然とその未来

2021年10月9日(土)～12月12日(日)

主	催	苫小牧市美術博物館
協	力	公益財団法人日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ、 北海道大学植物園・博物館、北海道博物館、 CISEネットワーク
後	援	苫小牧信用金庫、北海道新聞苫小牧支社、 株式会社苫小牧民報社、株式会社三星、 北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部
印	刷	有限会社ダイシン印刷

展示報告書

企画・発行	苫小牧市美術博物館（北海道苫小牧市末広町3-9-7）
発行日	2022年3月
編集・執筆	江崎逸郎（苫小牧市美術博物館 主任学芸員）
イラスト	菊地綾子
印刷・製本	有限会社ダイシン印刷

（本書掲載記事及び写真、図版の無断転載を禁じます。著作権は提供者に帰属します。）

